『東京大学言語学論集』**42** (2020.9) 297-309

グラウンディングと日英語の名詞

氏家啓吾
keigo5525@gmail.com

キーワード：認知文法　グラウンディング　定冠詞　名詞

要旨

言語表現の表す概念を発話の場（グラウンド）に結びつける意味的な働きを認知文法ではグラウンディングという。名詞句のグラウンディングは、英語では冠詞や指示詞などの文法的要素が主に担っているが、他の手段によっても実現されうる。本論文では名詞の意味とグラウンディングの関係について論じる。認知文法による英語の定冠詞の分析を紹介したのち、日本語の「犯人」などの関連する事柄に結び付けて理解される名詞が英語の定冠詞と類比的なグラウンディングの働きを含んでいることを示す。冠詞のない日本語ではこのような語彙的手段が重要な役割を果たしているため、英語と日本語の名詞句のグラウンディング方略には体系的な違いが見られる。

1. はじめに

名詞や動詞の表す意味内容を発話の場、すなわちグラウンド（ground）に結びつける意味的働きのことを、認知文法ではグラウンディング（grounding）と呼ぶ。たとえば、名詞 pencil はそれ自体としては物の種類を表すに過ぎない。いま目の前にある鉛筆の個体を指すには、this pencil のように完全な名詞句を作ることによって、名詞の表す概念を発話の場に結びつけなければならない。このとき指示詞 this が担っている働きがグラウンディングである。

本論文では、日本語と英語のグラウンディングと名詞の意味の関係について検討する。英語では冠詞や指示詞、数量詞といった文法的要素がグラウンディングの働きを担っているが、この働きは他の手段によっても実現されうる。英語の定冠詞の特徴を踏まえた上で、日本語の名詞「犯人」などの何らかの事柄と結びつけて理解される名詞の意味について検討し、これらがグラウンディングの働きを含んでいることを指摘する。具体的には、英語の定冠詞がプロファイル（指し示される概念）について定であるのに対し、「犯人」型の名詞はその参照項目（それが結びつけられる事柄）について定であると論じる。the cat の使用が特定の猫が同定可能であることを伝えるのと同じように、「犯人」の使用は、関連する犯罪事件が同定可能であることを伝えるのである。このことを踏まえて、日英語の名詞の意味と指示方略の差異を明らかにし、グラウンディング手段の多様性に目を向けた名詞句の対照研究が必要であることを示す。

構成は次の通りである。第 2 節では Langacker によるグラウンディングの考え方を導入し、英語の定冠詞の分析を紹介する。第 3 節では日本語の名詞の意味を検討する。関係概念を含む名詞のうちには、「犯人」など特定の参照項目に関連づけて理解される名詞があることを指摘し、

それらがグラウンディングの働きを意味に含んでいることを主張する。第 4 節では日英語の名詞句のグラウンディングの手段を対照する。第 5 節は全体のまとめである。

2. 名詞句のグラウンディング

2.1. グラウンディングとは

この節ではグラウンディングという考え方を Langacker（2008: 第 9 章）に基づいて紹介する。

グラウンド（ground）とは、発話事象そのものと話し手・聞き手、その二者の相互作用、そして目下の発話状況（特に発話の時点と場所）から構成される場であり、グラウンディングはそこに言語表現の表す概念を結びつける意味的な働きである。語彙的な名詞や動詞はその共同体で共有されている分類項目であり、タイプとしての概念を表すものである。cat のようなグラウンディングされていない名詞は、猫という種類の概念を表しているに過ぎない。同じように like のような動詞も単独では抽象的なプロセスの種類の概念を表しているに過ぎない。

一方で、談話の中で言語使用者は多くの場合、個別事例すなわちインスタンスについて語ろうとする[1]。猫という種類ではなく一匹一匹の猫について語ろうとするのである。インスタンスに言及するためにはタイプ概念を世界に結びつけなければならない。名詞や動詞をグラウンディングすることで初めて、個別のモノや個別の出来事を選び出しそれについて語ることが可能になる。たとえば、cat-lover という表現の中の cat は、グラウンディングされておらず、タイプを指定する働きだけをしている。this cat のように名詞句を構築して初めて、猫のインスタンスに言及することができる[2]。言い換えれば、ある対象に言及するためにそれが当てはまる分類項目の指定とグラウンドとの関係の指定とを組み合わせるということがここで行われているのである[3]。

グラウンディング機能を担う文法化した形態素をグラウンディング要素と呼ぶ。たとえば this cat では、cat がモノのタイプ概念を表し、グラウンディング要素である this がそのタイプの意図されたインスタンスとグラウンドとの関係を示す。ここで注意すべきなのは、グラウンディング要素はモノやプロセスのグラウンドとの関係を示す働きをするが、その際グラウンドそのものに意識が向けられるわけではないという点である。直示的な語の一部（you, now など）はグラウンドそのものの一部を指すが、グラウンディング要素はグラウンドを基準点として喚起しつつも注目対象として舞台上に乗せることはない[4]。英語の名詞句グラウンディング要素に

---

[1] インスタンスとは、その事例化ドメインの中に位置を占めると捉えられるものと定義される。物理的物体の事例化ドメインは空間であるから、たとえば猫のインスタンスは空間の中の特定の位置を占めると捉えられる（ある時点に空間の全く同じ位置に異なる二匹の猫インスタンスが存在することはありえない）。

[2] 認知文法では名詞に対応するグラウンディング済みの構造を名詞句（nominal）、動詞に対応するグラウンディング済みの構造を定形節（finite clause）と呼ぶ。なお、認知文法では名詞はモノ（thing）をプロファイルする表現、動詞はプロセス（process）をプロファイルする表現として定義される。プロファイルという用語については第 3 節を参照。

[3] a cat のようなグラウンディング済みの名詞句によって特定のインスタンスではなくタイプに総称的に言及する場合もある。そのような場合には、タイプについて語るために、代表として仮想的なインスタンス持ち出していると分析できる（Langacker 2008: 269–272）。

[4] より詳しく述べると、グラウンディング要素はグラウンディングされる記号の表すモノやプロセス自体をプロファイルする。たとえば this cat において this はスキーマ的なモノをプロファイルし、cat はそれと同じモノを

は、指示詞、冠詞、そして一部の数量詞（all, most, some, no, each, every, any など）が含まれる。節のグラウンディング要素には、三単現の-s、過去形の -ed、法助動詞が含まれる。

しかし、グラウンディングは言語表現ではなく働きであるため、文法的グラウンディング要素以外の手段によるものもありうる。以下では、まず Langacker による英語の定冠詞の分析を概観し、次にそうしたグラウンディング要素を伴わないグラウンディングのあり方を検討する。

2.2. Langacker による英語の定冠詞の分析

グラウンディングすることによって、進行する談話の中で話し手が指したい対象を選び出し共同的に注意を向けることが可能になる。個々の名詞句グラウンディング要素は談話の流れとの関係において指示対象をどのように位置付けるかという観点から特徴付けられる。

談話の進行は次々にアップデートされていく談話スペース（current discourse space; 以下 CDS と呼ぶ）として捉えられる。それを図式化したのが次の図 1 である。CDS には、共有知識も含め、談話の各段階で話し手・聞き手が利用可能なあらゆる情報が含まれる。そのうち特に個々の発話で喚起される部分を談話フレームという（角が丸い四角で示されている）。それぞれの発話はその直前にある先行談話フレーム（図の previous discourse frame）を足場にして解釈される。グラウンド（G）の話し手・聞き手が各段階の談話フレームに注意を向ける（破線矢印）ということも CDS には含まれている。

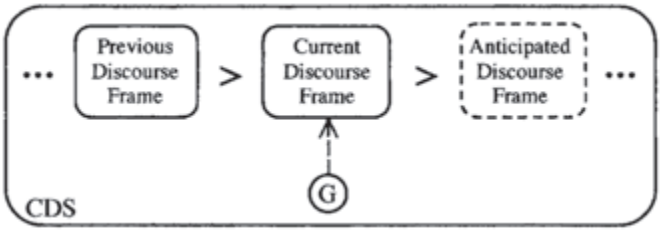

図 1. 談話の進行（Langacker 2008: 282）

この道具立てを用いた Langacker による英語の定冠詞 the の分析の概要を見る。the の意味記述において重要なことは、それが必ずタイプ指定とともに使われるということである。this や that などの指示詞は単独で名詞句として使えるが、a と the は名詞と組み合わせなければ名詞句を構成できない。このことを踏まえて、Langacker（2008: 285）は the の基本的な用法を次のように特徴付ける[5]。

（1） the をタイプ指定と組み合わせて使うことは、CDS の中から意図したインスタンスをただ一つ選び出すのにそのタイプ指定だけで十分であることを示す。

プロファイルしてその内容を精緻化する。節のグラウンディング要素（-s, -ed, 法助動詞）も同様にグラウンディングされる動詞とプロファイルが一致すると考えられている。

[5] ただしここでは可算単数の場合のみを考慮している。Langacker（1991: §3.1.1）も参照。

CDS の中に即座にアクセスできる適切な候補が一つしかないために、タイプ指定を与えるだけでその一つの対象に話し手と聞き手の共同的な注意を確立することが可能になるような場合に、定冠詞が使われるのである。

たとえば次のように、先行談話フレーム（図 1 の previous discourse frame）に当該のインスタンスがただ一つ存在している場合には定冠詞の使用が適切になる。

（2）　In the room were a puppy and three kittens. She picked up the {puppy/*kitten/*frog}.

（Langacker 2008: 288）

直前の談話フレームに 1 匹の子犬（puppy）と 3 匹の子猫（kitten）が導入されていた場合、子犬を指示したい時には、明白にただ一つのインスタンスが存在するため定冠詞が使える。グラウンディングがなされる談話フレームの直前のフレームに指定されたタイプのインスタンスがただ一つ存在しており、それゆえ子犬というタイプ指定さえ与えれば指示したい対象に話し手・聞き手の注意を共同的に向けることが可能であるからである。一方、子猫（kitten）というタイプ指定では、定冠詞の使用は不適切になる。複数のインスタンスが導入されており一つに定められないためである。カエル（frog）に関しては、選び出すべきインスタンスが CDS に見当たらないため定冠詞が不適切になる。

しかし、「タイプ指定だけで同定できる」という条件を満たしてさえいれば、先行談話フレームに存在しない場合でも定冠詞が使える。①知識やその場の状況からの推論により同定できる場合と、②当の名詞句の修飾要素が手がかりとなる場合が特に重要である。

① 知識やその場の状況からの推論により同定できる場合

先行談話フレームに当該のインスタンスが存在しなくても定冠詞が使える場合もある。

（3）　Our basketball team keeps losing. The center (*the forward) isn’t tall enough.

（Langacker 2017: 324）

（4）　The air conditioner just went off.　（Langacker 2008: 286）

バスケットボールチームがすでに話題になっている場合、一般的にそこにはセンターの選手が 1 人しかいないので（3）の発話では定冠詞が使える。バスケットボールチームについての知識（小田 2012 の「認知フレーム」）から推論によってただ一つのインスタンスを同定できるからである（一方フォワードは複数いるため不適切になる）。この現象は照応現象との関連から、連想照応、間接照応などと呼ばれることもある（小田 2012）。また、周囲にエアコンが一つしかない状況においてはあらかじめエアコンに注意が向けられていない場合でも（4）の発話が可能なのは、エアコンというタイプ指定があればどのインスタンスを指示したいか容易にわかるからである。その場の状況も利用可能な情報として CDS には含まれている。先行談話フレーム内に存在しなくても、当の名詞句のタイプ指定を手がかりに共有知識、推論、その場の状況などか

らインスタンスをただ一つ同定することができればよいのである。

② 当の名詞句の修飾要素が手がかりとなる場合

次のように、グラウンディングされる名詞句に含まれる制限的関係節の内容を踏まえてはじめて唯一性が確保される場合には定冠詞が使われることも注目に値する。

（5） The rare vase you bought at the auction looks good on your desk. （Langacker 2017: 322）

「花瓶」や「貴重な花瓶」というタイプ指定だけでは同定できなくとも、後続する関係節の「その競売で君が買った」という内容を踏まえた上でならただ一つ選び出せる場合には、使用が可能になる。定冠詞の使用が決定される際には、手がかりに利用可能なものとしてその名詞句の修飾要素も考慮される（CDS の中に含まれる）[6]。

以上のように、(1) の条件を満たせばよい。これを踏まえて Langacker は談話の進行（図 1 参照）の中での定冠詞によるグラウンディングを次のように図示している。

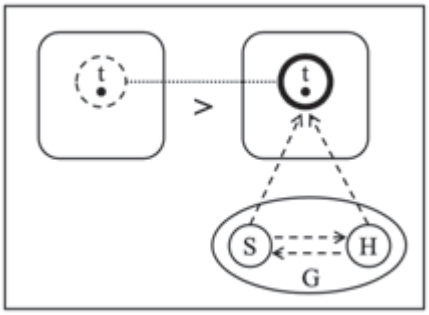

図 2. 定冠詞 the の使用（Langacker 2008: 285）

左右 2 つの角の丸い四角形は図 1 と同じく談話フレームを表しており、「>」は先行談話フレームからグラウンディングが達成される談話フレームへの移行を表している。円の中に t と黒い点があるのはモノタイプ t のインスタンスであることを表し、点線は同一性を表す。プロファイルされているインスタンスが太線の円で表されており、グラウンディングの結果確立される話し手（S）と聞き手（H）の共同的注意が S と H から円に向かう破線矢印で表されている（G はグラウンド）。したがってここでは、指定されたタイプ t のインスタンスが先行談話フレームに存在し、共同注意が向けられるプロファイルされたインスタンスがそれと同一であるということが示されている。先行談話フレームの枠内にあるインスタンスの円が破線になっているの

[6] 定性の判断の考慮範囲にはこのように先行談話だけでなく当の名詞句の修飾要素が含まれるが、その名詞句を構成要素とする節は含まれない。このことは節の概念化がそれに含まれる名詞句の概念化に依存しているという認知文法の基本的想定から説明できると Langacker（2017: 331）は論じている。

は、先行談話フレームに存在しない場合もあるためである。①、②のように先行談話フレームになくとも共同的注意の確立に十分であるような場合には定冠詞が使われるということを反映している。

2.3. グラウンディング要素を伴わないグラウンディング

名詞句のグラウンディングは冠詞や指示詞のような明示的なグラウンディング要素のみによって行われるわけではない[7]。要素を伴わないグラウンディングの一つの例が固有名詞によるものである。一般名詞は無数の個体に当てはまりうるタイプを表すため、個体を指すためにはグラウンディング要素を用いてインスタンスのレベルに変換する必要があった。それに対して固有名詞の意味はタイプとインスタンスが一体化した概念であると言える（Langacker 2008: 317）。その背後には共同体の中にある名前を持つ個体は一つしかないという素朴モデルがある。そうしたモデルが CDS の一部として固有名詞の意味を支えているため、個体に到達するために一般的なタイプ概念を経由する必要がないのである。したがって固有名詞はそれ自体に定のグラウンディングが内在していることになる。

要素を伴わないグラウンディングのもうひとつの例として、非明示的グラウンディングのパターン化が挙げられる（Langacker 2008: 496–499）。ルイセーニョ語では日本語と同様に裸名詞を定の場合でも不定の場合でもそのまま名詞句として使うことができる。そのような言語においても、名詞の表すタイプのインスタンスがただひとつ CDS にある場合の名詞の使用は、まさにそのような使用としてパターン化し慣習的単位となりうる。そうすると、明示的要素がなくともいわば談話レベルの構文としてグラウンディングの働きを担うようになるのである。

このように、名詞句のグラウンディングという働きは文法的要素以外の手段によっても担われうるのである。このことからすると、冠詞を持たない日本語においても、英語とは異なる手段を用いたグラウンディングが用いられている可能性がある。次節では日本語の一部の名詞にはグラウンディングが内在していると論じる。

3. 日本語の名詞に内在するグラウンディング

この節では日本語の名詞の意味とグラウンディングとの関係を検討する。意味に関係概念が含まれている名詞の中に、「犯人」など特定のインスタンスと結びつけて理解されるものが存在することを示し、このタイプの名詞がグラウンディングの働きを含んでいることを示す。

3.1. 関係概念をベースに含む名詞の分類

語の意味はその指示するものに尽きない。たとえば「斜辺」という名詞は、直角三角形の概念を喚起した上でその一部である直角に向かい合う辺を指し示すという意味の構造を持っている。認知文法ではこのように、言語表現の意味は一定の概念内容を喚起した上でその一部を指

[7] この点について Langacker は近年、グラウンディングの働きそのものとグラウンディング要素をかつて自身がしばしば混同してしまっていたと告白し、区別すべきであると主張している（Langacker 2017: 311）。

し示すという 2 つの側面からなると考える。喚起される概念内容をその表現の「ベース」(base) と呼び、指し示された部分を「プロファイル」(profile) と呼ぶ。またその意味で指し示すことを「プロファイルする」という。

名詞の中には関係の概念をベースに含むものがある。その一部には、関係概念の項を特定しなければならないものが存在する。たとえば、「喫煙者」と「犯人」を比べてみよう。前者はタバコを吸うという行為を、後者は犯罪をなすという行為との関係を含んでいる。どちらも行為をベースとしその行為者をプロファイルする名詞であるが、決定的に異なる点がある。「喫煙者」は習慣的に喫煙する人を表すのに対して、「犯人」は犯罪行為の特定のインスタンスと結びつけて理解されるという点である[8]。

「喫煙者」が使われるとき、個々の喫煙のインスタンスとは関係なく、喫煙という行為タイプを習慣的に行う人として理解される。「ピアニスト」「小説家」などの職業を表す名詞も行為の個々のインスタンスとは関係なく理解されるという点では共通している。また、「嘘つき」などの傾向を表す名詞や「ナイフ」などの道具名詞もこの類である。いずれも、タバコを吸うことや嘘をつくことなど、関連する行為のタイプは指定されているがその個別のインスタンスは問題にならない。

一方、「犯人」が使われるときは犯罪事件の特定のインスタンスが必ず念頭にあり、それとの関係において行為者がプロファイルされる。そのため「あなたは犯人ですか」と尋ねられても、どの事件が話題になっているのかわからなければ答えようがない。この類には「優勝者」「発見者」「著者」などの名詞も含まれる。さらに一般的には、ベースに含まれている関連する事柄をインスタンスのレベルで同定する必要がある名詞と特徴づけることができる。この類には幅広い名詞が含まれる。名詞「著書」も、それを書いた人インスタンスを同定しその人との関係で本をプロファイルする名詞と言えるためここに含まれる。また「原因」のような事象間の関係を表す名詞もこの類になる。庵（2019）は「著書」などの名詞を「1 項名詞」と呼び、談話の結束性を生み出す語彙的手段であると論じている（庵 2019: 12 章; Iori 1997）[9]。また、この類は西山（2003）が「非飽和名詞」と呼ぶ名詞の一部である[10]。

---

[8] 人を指す名詞を関連する事象のアスペクト・テンスの観点から分類している宮島（1995）は、「喫煙者」にあたるタイプの名詞を「潜在的なシテ」と呼ぶ。「犯人」にあたるタイプは宮島が「現実のシテ」と呼ぶ類の一部（「観客」など）および「経験者」と呼ぶ類の一部（「合格者」など）に相当する。また Pustejovsky（1995）による生成語彙論では「喫煙者」にあたる名詞を「個体レベル名詞」(stage-level nominals)、「犯人」にあたる名詞を「ステージレベル名詞」(stage-level nominals）と呼んで区別し、分析を与えている（Pustejovsky 1995: 229)。影山（1999, 2002）や Ono（2016）でその分析が日本語の動作主名詞に適用されている。この分析の検討は別稿に譲る。

[9] 庵の議論は、1 項名詞・0 項名詞が「統語論的」性質であることを強調している点など立場の違いはあるが、着目している現象と分析の方向性は本稿と同じものである。参照項目の定性については触れられていないものの、定性との関連についても検討されている。

[10]西山は非飽和名詞を「「X の」というパラメータの値が定まらないかぎり、それ単独では外延（extension）を決めることができず、意味的に充足していない名詞」（西山 2003: 33）と定義している。非飽和名詞には「パラメータ」（本稿の用語では参照項目）としてインスタンス同定を要求するものとタイプ指定を要求するものとがある（山泉 2010)。たとえば「常習犯」は何の常習犯か指定しなければならない非飽和名詞だが、ここで要求されているのは犯行のタイプの指定であって、個々の犯行インスタンスは問題になっていない（ある一回の出来事についての常習犯というのは意味をなさない)。ここで「犯人」型の名詞と呼んでいるものに相当するのは非飽和名詞の中でも参照項目のインスタンスの同定を要求するものである。

3.2. 「犯人」に内在するグラウンディング

「犯人」に対する犯罪事件や「著書」に対する書き手など、これらの名詞のベースに含まれている関連する事柄を一般的に参照項目と呼ぶとすれば、次のようにまとめられる。

(6) 「犯人」型の名詞は、参照項目の特定のインスタンスと結びつけて理解されなければならない。

犯罪がCDSに存在しない状況で「あいつが犯人です」などと言ったとしたら、聞き手はどの事象に結びつけていいのかがわからず戸惑うことになる。言い換えれば、「犯人」が使用される時には、そのプロファイルを結びつけるべき犯罪事件インスタンスが同定できると想定されているということである。したがって次のように言える。

(7) 「犯人」型の名詞を使うことは、CDS の中からその参照項目のインスタンスをただ一つ選び出すのにその名詞句によるタイプ指定だけで十分であることを示す。

たとえば「犯人」「著書」を使うことは、当の名詞句だけで関連する犯罪事件・書き手のインスタンスを聞き手が選び出せるということを示している。これは (1) と見比べると明らかなように、英語の定冠詞の特徴づけと類比的である。これらの名詞は意味にグラウンディングの働きを含んでいるのである。この類比的な関係を次のようにまとめられる。

(8) 英語の定冠詞を伴う名詞句はグラウンディングされる名詞のプロファイルについて定であるのに対し、「犯人」型の名詞は参照項目について定である。

英語の定冠詞の働きと「犯人」型の名詞の働きは、プロファイルに関わるか参照項目に関わるかが異なるだけで、同じく定のグラウンディングを行っているのである。

さらにこうした名詞の中には、参照項目が一つに決まればデフォルト的にそのプロファイルも一つに決まるものが多数ある。一つの事件の犯人は複数いる場合もあるがデフォルト的には一人と想定されているだろう。その場合にはプロファイルも定になる。したがって「犯人」は参照項目についてもプロファイルについても定であることになる。

「犯人」型の名詞のグラウンディングの働きを、英語の定冠詞（図 2）をもとにして図に表すと以下のようになる。

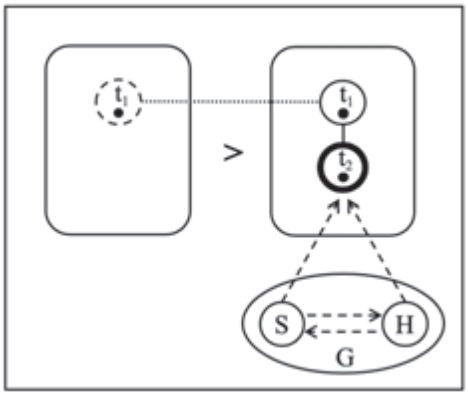

図 3.「犯人」型の名詞に内在するグラウンディングの働き

図の t_1 が名詞のベースにある参照項目のタイプ指定で、t_2 がプロファイルのタイプ指定である（黒い点はそれぞれのタイプのインスタンスを表す）。たとえば「犯人」という名詞が使われる際は、参照項目である犯罪事件というタイプ（t_1）の CDS にある特定のインスタンスを同定し、それとの関係（t_1 と t_2 を結ぶ線によって表されている行為と行為者の関係）に基づいて、行為者（t_2）のインスタンスに共同的注意を確立する。以上のことが「犯人」の慣習的意味に含まれている。

名詞によるタイプ指定だけで参照項目インスタンスをただ一つ同定することができればよいため、先行談話フレームとの関係についても第 2 節で英語の定冠詞について見たのと同じことが当てはまる。

① 知識やその場の状況から推論して同定できる場合

英語の例文（3）でバスケットボールチームが導入された後に the center と言えるのと同じように、すでに導入された対象から一般的知識などを使って名詞の参照項目のインスタンスの存在が推論される場合には「犯人」が使える。

（9）　昨日ある推理小説を読んだ。半分読んだところで犯人がわかってしまった。

一文目には参照項目インスタンスに当たるものが明示的に示されていないが、推理小説が導入されているため事件の存在が推論される。

② 当の名詞句の修飾要素が手がかりとなる場合

また、英語の例文（5）で関係節の「その競売で君が買った」という内容を手がかりにしてインスタンスが一つに決まる場合にも定冠詞を使うことができたのと同じように、聞き手が参照項目のインスタンスを同定するための手がかりとして用いることのできる範囲にはその当の名

詞を修飾する要素も含まれる。

（10）　a.　5 年前に私の財布を盗んだ犯人
　　b.　あの事件の犯人

（10a）では、「犯人」の参照項目のインスタンスは「5 年前に私の財布を盗んだ」という節で表されている事象である。「犯人」の参照項目のインスタンスが当の名詞句の修飾要素によって特定できるため、条件が満たされ適切な使用になっている。(8b) のように参照項目が「(名詞句)の」の形で導入される場合も同様に、「あの事件の」という要素を考慮すれば参照項目を同定できる。このように、「犯人」が単独で使われる場合も「あの事件の犯人」のように修飾要素で参照項目が特定される場合も (7) に示した一般化で扱うことができる[11]。

以上のように、「犯人」型の名詞が参照項目について定であると考えることにより、英語の定冠詞に関する分析をもとにこれらの名詞の用法が説明できる。

4. 日英語のグラウンディング

日本語のある種の名詞について、英語の定冠詞と類比的なグラウンディングの働きが内在していることを論じた。そうであるならば、英語において冠詞が担っている機能の一部を、日本語では名詞の語彙的区別が部分的に担っていると考えることができるのではないだろうか。

坂原（1996, 2016）は日本語と英語の名詞句の体系を対照している。坂原は日本語の裸名詞句は「指示対象のカテゴリの情報しか与えず、定表現にも不定表現にもなれる」のに対し、英語の定冠詞を伴う名詞句は「指示対象のカテゴリだけでなく、それが聞き手に既知であるという情報も与える」という違いが存在すると述べ（坂原 2016: 175）、その違いにもかかわらず日本語の裸名詞句の用法が英語の定冠詞を伴う名詞句の用法と対応する場合が多いことを指摘している。そのような全体的な対応関係はたしかに成り立っているが、裸名詞句は「カテゴリの情報しか与えない」、つまりタイプ指定だけを行うという想定は問題がある。

前節で論証したように、ある種の名詞はタイプ指定だけでなく、関連する事柄についての認識的ステータスの情報を与えるという形で、グラウンディングの働きも担っている。「作家」は特定の本に結び付けられないが、「著者・作者」は必ず特定の本に結び付けられる。この区別は参照項目の認識に関わるものであり、したがってグラウンディングについての区別である。

このことを踏まえると、ある種の照応現象に関して興味深い分析ができる。坂原は、次のように先行談話からの推論によって同定可能であるため英語で定冠詞が使われる間接照応の例を扱っている。

---

[11] 西山（2003）の説を引き継いだ西川（2013）の非飽和名詞に関する議論では、「～の」という形式での参照項目の特定が基本とされており、連体修飾節を使った（10a）に相当する例については、「一朗を殺した（αの）犯人」のように、見えない「～の」を想定する分析が与えられている（西川 2013: 45）。これに対し本稿の分析は、このような見えない要素を用いる必要がない点、および、先行文脈による特定、連体修飾節による特定、「NP の」による特定という 3 つの形式を「定性」という一般的な概念によって統一的に説明できるという点で優れたものとなっている。

（11） a. I read an interesting book. The author is a good friend of mine.
b. 私は面白い本を読んだ。著者は私の友人だ。 （坂原 2016: 163）

坂原によれば、対応する日本語で裸名詞句が使われるのは、日本語の裸名詞が指示対象のタイプ指定のみを与えるため、談話資源（CDS に概ね相当するもの）の中のどの領域にあるものをも指せるという点で、英語の定冠詞を伴う名詞句と共通しているためであるという。たしかにこの例では両者が対応している。しかし本稿の見方では、ここでの「著者」の使用は積極的なグラウンディングの機能を果たしている。「著者」の参照項目（本）のインスタンスがただ一つ同定可能であり、それと結びつけて理解せよということをこの名詞句は伝えている。

このことは、英語の定冠詞つき名詞句が日本語の裸名詞句表現に対応していない例を見ると一層明らかになる。次の英文と日本語訳を見よう[12]。下線の箇所に注目してほしい。

（12） But a novel is to be read with enjoyment. If it doesn't give the reader that, it is, so far as he is concerned, valueless. In this respect every reader is his own best critic, for he alone knows what he enjoys and what he doesn't. I think, however, that <u>the novelist</u> may claim that you do not do him justice unless you admit that he has the right to demand something of his readers.
（W. Somerset Maugham, *Ten novels and their author*s）

（13） だが、小説はあくまで楽しんで読むのが本当である。ある小説を読んで楽しく思えないならば、その作品は、その読者に関する限り、何の価値も持たない。この点から言って、読者は誰も自分自身が最良の批評家である。何が楽しく読めるかまた読めないかが分かるのは当の読者その人だけだからである。だがその一方、<u>小説の作者</u>の方では、読者からあるものを要求する権利があることを認めようとしないならばその読者は作者に対して不当であると主張することだろうと思う。
（西川正身訳『世界の十大小説』）

英語の定冠詞を伴う名詞句 the novelist が、日本語訳では「小説の作者」となっている。日本語の裸名詞句がタイプ指定のみを行なっているために英語の定冠詞と対応するのだとしたら、ここで「小説家」という裸名詞句が用いられてもよいはずだが、ここではそうではなく「作者」が用いられている。これは偶然ではないであろう。

「作者」は参照項目のインスタンスに結び付けて理解される「犯人」型の名詞であった。ここでの the novelist は、小説（a novel）が談話に導入されていることに基づいて、その対象にプロファイルを結びつける間接照応である。英語の novelist は個々の小説とは関係なく使うこともできるし、定冠詞を伴って CDS にある特定の小説と結びつけて間接照応で使うこともできる。一方、日本語の「小説家」は裸名詞句として本のインスタンスと結びつけて使うことは難しく、結びつける場合には「作者」や「著者」が選択されるのである。この例は、英語が冠詞という手段で行っているグラウンディングを日本語では部分的に名詞の語彙的な区別が担って

[12] この英文と訳は織田（2002: 48–50）で引用されており、ここでの冠詞の用法が議論されている。

いることを示している。両言語の名詞句の用法を比較する際には、名詞に含まれるグラウンディングの働きにも目を向けなければならない。

また、グラウンディングに関する区別を日本語では部分的に名詞の語彙的指定が担っているのだとすると、日本語は英語に比べてグラウンディングに関する指定を持つ名詞が多い可能性がある。たとえば、英語の名詞 painter は「画家」に相当する意味もあるが、painter of the picture のような表現では「その絵を描いた人」を意味する。つまり名詞としては特定のインスタンスに結びつけるかどうかの指定がない。日本語の「画家」は職業としてのみ解釈され、「特定の絵を描いた人」という意味で使われることはない。英語の動作主名詞に関してこのような多義性は多数見られるのに対し（Alexiadou and Schäfer 2010: 11）、日本語では「-者」（e.g. 運転者）「-手」（e.g. 運転手）などの接辞によって、特定インスタンスに結びつけるかどうかが緩やかに形態上区別されている（Ono 2016: 615）。確かな結論を出すにはさらなるデータが必要だが、このような違いがあるとすれば、両言語で名詞句のグラウンディングの役割分担が異なることと連動したものと捉えることができる。

5. 結語

以上、認知文法のグラウンディングの概念を紹介し、グラウンディング要素である英語の定冠詞の特徴を踏まえた上で、参照項目のインスタンスと結びつけて理解される名詞の意味を検討して、これらが英語の定冠詞と類比的なグラウンディングの働きを含んでいることを指摘した。また、そのようなグラウンディング手段の多様性を前提にした名詞句の対照研究が必要であることを主張した。

参考文献

Alexiadou, Artemis and Florian Schäfer (2010) On the syntax of episodic vs. dispositional -er nominals. Artemis Alexiadou and Monika Rathert (eds.) *The syntax of nominalizations across languages and frameworks*, 9–38. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

庵功雄 (2019)『日本語指示表現の文脈指示用法の研究』東京: ひつじ書房.

Iori, Isao (1997) The effect of inherent characteristics of nouns on co-reference. 『阪大日本語研究』9: 121–142.

影山太郎 (1999)『形態論と意味』東京: くろしお出版.

影山太郎 (2002)「動作主名詞における語彙と統語の境界」『国語学』53: 44–55.

Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of cognitive grammar, vol. 2, Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*. Oxford: Oxford University Press.

Langacker, Ronald W. (2017) *Ten lectures on the elaboration of cognitive grammar.* Leiden: Brill.

宮島達夫 (1995)「ヒト名詞の意味とアスペクト・テンス」川端善明・仁田義雄 (編) 『日本語文法 体系と方法』157–171. 東京: ひつじ書房.

西川賢哉 (2013)「非飽和名詞を主名詞とする連体修飾節構造の意味表示」西山佑司 (編) 『名詞句の世界』29–50. 東京: ひつじ書房.

西山佑司 (2003)『日本語名詞句の意味論と語用論: 指示的名詞句と非指示的名詞句』東京: ひつじ書房.

織田稔 (2002)『英語冠詞の世界 英語の「もの」も見方と示し方』東京: 研究社.

小田涼 (2012)『認知と指示 定冠詞の意味論』京都: 京都大学学術出版会.

Ono, Naoyuki (2016) Agent nominals. Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.) *Handbook of Japanese lexicon and word formation*, 599–629. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Pustejovsky, James (1995) *The generative lexicon.* Cambridge, MA: MIT Press.

坂原茂 (1996)「英語と日本語の名詞句限定表現の対応関係」『認知科学』3(3): 38–58.

坂原茂 (2016)「英語の定冠詞句と日本語の裸名詞句の類似」西村義樹・藤田耕治 (編) 『日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ』154–179. 東京: 開拓社.

山泉実 (2010)「節による非飽和名詞 (句) のパラメータの補充」東京大学総合文化研究科博士論文.

Grounding and Japanese and English Nouns

UJIIE Keigo

keigo5525@gmail.com

Keywords: Cognitive Grammar, grounding, definite article, noun

Abstract

In Cognitive Grammar, the semantic function which connects the concepts coded by linguistic expressions to the speech situation (i.e. the ground) is referred to as grounding. Nominal grounding is implemented not only by the grammatical elements such as articles or demonstratives, but also by other means. This paper examines the relation between grounding and the lexical meanings of nouns in Japanese and English. After an overview of the Cognitive Grammar analysis of the English definite article, it is shown that relational nouns of a certain kind embody the function of grounding. In Japanese, which lacks articles, lexical grounding of this kind plays an important role, resulting in the systematic difference of the grounding strategies in these two languages.

（うじいえ・けいご　東京大学大学院）